

ごきそ ホットライン

表彰者紹介

(前回掲載以降に連絡のあった方)

(平成18年4月授賞)

「瑞宝双光章」
(電気通信功勞)

関谷 大造



【学 歴】

昭和23年3月 名古屋高等工業学校電気科第二部卒業

【職 歴】

昭和23年4月 通信省名古屋工務局名古屋市外電話局
昭和34年3月 東海通信局施設部
昭和40年10月 静岡通信部設計課長
昭和46年12月 名古屋データ通信局第一施設部長
昭和51年3月 半田電報電話局長
昭和56年3月 豊橋電報電話局長
昭和58年2月 退職
昭和58年4月 中部通信(株)入社
昭和59年5月 中部通信(株)取締役
昭和60年4月 退社

(平成20年4月授賞)

「旭日雙光章」
(鉄道事業功勞)

成田 正敏



【学 歴】

昭和35年3月 名古屋工業大学機械工学科卒業

【職 歴】

昭和35年4月 (株)成田製作所
昭和38年8月 同社取締役
昭和44年12月 同社専務取締役
昭和59年4月 同社代表取締役社長
平成20年6月 同社取締役会長

(平成21年11月授賞)

「瑞宝中綬章」
(運輸行政功勞)

安田 善守



【学 歴】

昭和36年3月 名古屋工業大学土木工学科卒業

【職 歴】

昭和36年4月 運輸省
昭和46年4月 同省航空局計画課専門官
昭和51年1月 同省第三港湾建設局関西空港調査室長
昭和58年4月 同省航空局建設課長
平成元年4月 同省大阪航空局長
平成7年6月 関西国際空港(株)常務取締役
平成12年9月 (株)日建設計顧問
平成17年5月 退社



〔叙位叙勲受章者は名古屋工業会で表彰しますので、事務局まで連絡いただきますようお願いいたします〕

交流コーナー

最先端宇宙技術と自然が共存する都市 フロリダ州オーランド

未来材料創成工学専攻 助教 田中正剛

宇宙航空研究開発機構（JAXA）と進めてきた共同研究が実を結び、このたび国際宇宙ステーション（ISS）での実験の機会を得た。4月5日打ち上げのスペースシャトルに我々の実験試料を搭載しISSまで運ぶ。このシャトルには日本人宇宙飛行士 山崎直子さんが搭乗することもあり、日本実験棟「きぼう」開発、宇宙実験関係者や山崎さんゆかりの方々などによる視察ツアーが催行された。筆者もこのツアーに同行し、シャトルの打ち上げに立ち会うことができた。

今回の目的地はフロリダ州、アメリカ東南部の半島が大きくせり出したところである。中部国際空港～成田空港～シカゴ オヘア空港を経由してオーランド国際空港まで、16時間ほどの飛行機の旅であった。久方ぶりの海外、どんなものが見られるのか、宇宙船の発射はどれほど凄いものなのかと色々なことに思いをはせているうちに、あっと言う間に…というよりは多少長い時間だったように思えたが、想像していたよりは遙かにすぐに到着した。オーランドは奄美大島とほぼ同じ緯度に位置している。空港に到着し、外に出ると暖かい空気が出迎えてくれた。明日は視察ツアー主催のケネディスペースセンター見学である。

＜ケネディスペースセンター＞

シャトル打ち上げがあるケネディスペースセンターは、オーランド国際空港から東に車で1時間半のところにある。オーランドはアメリカでも有数のテーマパークの宝庫であり、最大級の観光都市である。日本の観光都市であればバスや電車など何かしら公共交通機関がありそうなものだが、ここにはオーランドから東に1時間半走ってくれるバスも電車もない。ここでは車での移動が基本のようで、空港にはレンタカー会社のカウンターがずらりと並んでいた。

筆者もレンタカーを手配し、ツアー集合場所がある近隣の街ココアビーチへと移動した。

ツアー参加者はざっと見て150名ほどであろうか、大型観光バスに乗り込みスペースセンターへと向かった。ケネディスペースセンターはテーマパークとしても有名で、本物のロケットや月探査機の展示、シャトル発射体験ができるアトラクションなど大人も子供も楽しめる施設である。まずは人気のバスツアーに参加する。これはセンターの広大な敷地内を専用のバスで一巡りしてくれるもので、シャトルの発射台や組み立て工場などを間近で見学することができる。残念なことにシャトル打ち上げ前日であったためセキュリティレベルが上がっているとのことで、停車箇所はアポロ/サターンVセンターという1960年代から行われた月面着陸計画の展示物がある施設のみであった。そこには本当にこれを宇宙に飛ばせたのかと瞬時には理解できないくらいに大きなロケットが横たわっていた。長さは110mだそうで、スペースシャトルを二つ並べてもかなわない長さだそうだが…実感はわからない。とにかく大きいのである。この当時のロケットはほとんどの部分が「使い捨て」で、打ち上げられると地球に戻ってくることは



月面探査ロケット
(末端まで延々と100m以上のおおきさ)

ないという。唯一帰還するのは100m超のロケット先端に搭載されている3人乗りの円錐型のカプセル部分だけなのである。一方で、スペースシャトルはロケットブースターも含めてリサイクルが可能になっているそうだ。宇宙技術の発展と同時に、人類は地球上だけでなく地球の周囲の環境保全の義務も果たさなくてはならないのだとあらためて気がつかされる場面であった。建物の外に出ると遠くにシャトルの発射台が見えた。明朝、いよいよ打ち上げかと思うと胸が躍るのであった。

バスツアーを終えると、各種のアトラクションの体験に移る。遊園地気分である。もっとも興味深かったのはシャトル発射体験だ。これはシャトルに似せたブース内のシートに腰掛け、宇宙飛行士が発射台に乗り込み宇宙空間に飛び出すまでを映像と振動で疑似体験するというものである。宇宙飛行士はどれだけ過酷な状況で宇宙に飛び立つのだろうかと思える乗車した。実際には宇宙服を着て、危険と隣り合わせの状況で飛び立つのであるから、ジーパンとTシャツで乗って安全が保証されているコレとは緊張感が違うはずだが、それ以外はホンモノを忠実に再現しているものとすれば、思いの外、快適に宇宙に行けるのである。カウントダウンの0と同時にシート全体が激しく振動する。少々性能の悪いマッサージチェアに乗っている感じで、首元のお肉がプルプルと震えるのが続く。シャトルが両脇に抱えている白いロケットブースターが切り離されるとプルプルも収まり、飛行機に乗っているような推進力を感じる程度になる。最後にオレンジ色の燃料タンクが切り離されると途端にフワッと浮いたような感覚になる。どうやら宇宙空間に到達したようだ。実際にはブース全体が後ろのめりになったり前のめりになったりすることでフワリと浮いたように感じる錯覚のようだが、おもしろい感覚であった。実際に宇宙に行くことを夢見て、それを実現した宇宙飛行士は、現実にフワリと浮く瞬間はさぞかし興奮するのだろうと想像するのであった。

＜スペースシャトル打ち上げ視察＞

スペースシャトル ディスカバリー号の発射予定は4月5日早朝6時21分である。見物人は発射時刻よりも何時間も前からスタンバイする必要があるので深夜の時間帯に再集合し、見学ポイントに移動しなくてはならない。前日のスペースセンター見学からホテルに帰って昼寝程度の睡眠をとり、再び集合場所へと動き始める。

見学場所は昨日と同じアポロ/サターンVセンターであった。ここは関係者が招待を受けて見学するポイントで、特設された階段状のベンチはVIP席なのだそうで、山崎さんだけでなく他の宇宙飛行士に関係した招待者も含め何百人というVIPが打ち上げを見守る。筆者もVIPの一人ではあったが、早い者勝ちであるベンチは何時間も前から満席の様子であったので、ベンチ前方の芝生エリアに陣取った。発射台との距離は6km。一般人では最も近い地点からの見学である。暗闇に煌々と照らされた発射台が遠くに見え、監視用なのかヘリコプターやジェット機がたびたび行き交い、独特の緊張感が伝わってくる。シャトルの打ち上げは機器の異常はもちろん天候の影響も大きく、直前でも不具合があれば中止して発射は延期になる。実際に



打ち上がるシャトルの様子

何度も見学に来たにもかかわらず、延期が重なって打ち上げを見られずにいる人も多くいるのだそうだ。見学席で立ち会っている人たちは何処かで万が一のときの心の準備をしているように見え、見学席にも特有の緊張感が漂っているのである。それでもこの日は80%の確率で打ち上げ見込みだそうで、霧の発生が唯一の心配だそうだが、見た限りでは霧はない。順調にカウントダウンが進んでいくのであった。

打ち上げ予定時刻の10分ほど前、夜空を明るく星がスーッと横切っていく、歓声が上がる。これから飛び立つシャトルが目指すISSだった。夜空の中で一番明るい星ほどに光るISSは流れ星のように速くもなく、一定速度で空を滑るように進んでいく。シャトルを出迎えるように現れ、見物人をしばし魅了したISSは水平線の彼方へと消えていった。時刻は6時20分、目の前の空が少しだけ赤く染まりはじめた夜明け前、いよいよ発射の時間である。

3.2.1…閃光とともに噴煙がわき上がる。それまでは暗かった空が眩しすぎるほどの光で明るくなり、ロケットは勢いよく上昇していく。はじめ聞こえてくるのは周囲の歓声だけであったが、数秒後に轟音が響いてくる。さらに数秒後、今度は振動が伝わってきた。轟音と閃光を放ちながらシャトルは宇宙空間へと突き進んでいき、やがてシャトルは先ほど見たISSと同じ星のような光になった。発射から10分程で静寂が戻り、ショーを見終えた人々は満足そうな笑みを浮かべ、ロケットが無事に飛び立った安堵感をにじませながら、それぞれのバスへと帰って行くのであった。帰りのバスの中、今飛んでいった見たこともないような光の中には人が搭乗していて、宇宙空間で待っている宇宙ステーションまで到達するのかなと思うと、人類はもの凄いものを造り出せるのだなと感心するばかりなのであった。

<自然保護区 フロリダ州>

たったいまロケットが打ち上がったケネディスペースセンターは、広大な自然保護区の一部に位置しており、日本ではまずお目にかかることはないような珍しい野生動物に会うことがで

きる。スペースセンターに向かう途中は平原や湿地帯が広がっており、水路にはペリカンやツルっぽい鳥類、少し視線を上げるとハクトウワシなど大型の猛禽類を見ることができた。リスやアルマジロなどのほ乳類もよく見かけるらしい。また、アメリカ南部はワニの生息地としても有名で、スペースセンターのあるこの自然保護区にも敷地内に約5,000頭のワニがいるそうだ。実際にバスの車窓から眺めていた道路横の水路には、頭を出してプカリと浮いているワニを見つけることができた。一度見つけ方がわかってしまえば、水路には数十メートルおきに見ることができ、どんな動物よりも頻繁に遭遇するのである。スペースセンター内のアトラクションがひしめくパーク内の池も例外ではなく、水のあるところにワニありなのである。その柵には「ワニに餌を与えないで」の看板が掲げてあった。さながら猫のような身近さでワニと出会えるのである。かといって人間が怯えるわけでもなく、ワニが威嚇するわけでもない。適度な距離感を保ちながら、時間と場所を共有している風景であった。近くの自然公園を訪れた際にも、ワニ注意の看板を見かけたが「ワニがいるから泳ぐな」ではなく「気をつけて泳げ」なのである。アメリカの大らかさと自己責任という概念が定着した国民性に触れられた場面であった。

滞在したビーチ沿いのホテルからは見渡す限りに大西洋が広がり、水平線から昇る日の出を見るのが日課となった。空が真っ赤に染まり、ゆっくりと太陽が昇る。それを遮るビルもなければ島さえもない絵に描いたような海から昇る日の出であった。オーランド滞在最終日には、イルカが背びれを出して泳いでいるのがホテルのバルコニーから見られた。これほど多くの自然が体感でき、宇宙開発の最先端技術を目の当たりにできる環境は他に類を見ないフロリダ特有の経験であったと思う。

技術開発のために自然を犠牲にするのではなく、自然と共存しながら宇宙へと人類を運び続け、宇宙船をリサイクル可能にした技術力がそこにはあった。今回の滞在を通して見たもの聞いたもの感じたものは、研究者としての今後の



発想や展開力に必ずや良い刺激になってくれるものだと思う。秋には我々が実施している実験試料が宇宙ステーションから帰ってくる。どんな結果が得られるか楽しみである。

今回の打ち上げ視察への参加を快諾していただいた本研究プロジェクトの代表研究者である木下 隆利 理事・副学長、JAXAの共同研究者、打ち上げ視察運営組織の方々に感謝を申し上げます。



水辺で見かけるワニ注意の看板

名古屋工業会の本部関係会議情報（平成22年7月～ 22年8月）

○広報委員会 7月6日(火)18:00～

議題1 広報委員の役割について

委員会の役割について再確認を行なった。

議題2 会誌編集について

会誌編集の基本方針、記事の収集、刊行日程や特集記事等について検討した。

議題3 その他

ホームページあり方やweb会員について意見が出された。

○支部長会議 7月10日(土)13:00～

議題1 大学の近況について

北村副学長からプロジェクターにより詳細な説明があった。

議題2 平成22年度の事業計画と活動方針について

工業会の当面の課題について意見交換し、大学の執行部との意見交換会の参考にする事とした。

（工業会の当面の課題）

・公益法人制度改革対応・大学支援(優秀な学生を集める方策)・新入生の入会率の向上策・卒業生名簿の管理体制

交流コーナー

「世界一受けたい授業：混ぜる科学」への出演まで

生命・物質工学科 加藤 禎人 (D61)

1. 出演までのいきさつ

私は、当時化学工学担当だった山田幾穂先生 (D25) のもとで蒸留計算をテーマに、昭和61年本学工業化学科を卒業し、昭和63年本学大学院物質工学専攻を修了致しました。その後、研究室OBである多くの先輩方のご指導のおかげで東レ株式会社に入社させて頂き、愛媛工場で炭素繊維の技術開発（その中でも焼成前のアクリル繊維の製糸技術開発）に取り組んでいました。その後、突然山田先生から呼び出しがかかり、縁あって母校に戻ってくることになり、平岡節郎先生 (D38) のもとで助手として攪拌槽に関わる研究に着手することになりました。学生時代のテーマは分離、赴任してからのテーマは混合ということでこれも何かの縁でしょうか。何分初めて関わるテーマでしたので、研究室OBとしては私の方が先輩でしたが、指導をしながら、研究では先輩である院生や4年生にいろいろ教えを請う、複雑な状況の下で研究がスタートしました。そして、九州大学で学位を取得することができ、研究を進める素地が完成致しました。（なんと、このとき学位論文の主査をして頂いた先生もかつて東レに勤めておられていたという経歴の持ち主で、ここでも縁を感じました。）

こうして、攪拌槽（混ぜる手法の科学）に関する研究を行う傍ら、平成4年から平岡先生が会長を務めていた化学工学会ミキシング技術特別研究会の事務局を2年任され、産学含め非常に多くの方と知り合いになることができました。その後、5年前にその研究会（現在は化学工学会粒子・流体プロセス部会ミキシング技術分科会）の副会長兼事務局をふたたび任される

ことになり、4年間、ホームページの充実や本技術に関する書籍の作成および講習会の運営と、ここでも非常に多くの方に接することができ大変勉強になりました。同時に化学工学会東海支部の会計幹事、常任幹事および庶務幹事を担当させて頂き、また、化学工学会産学連携センターグローバルテクノロジー委員会の事務局も担当し、本当に多くの企業の方と知り合う機会（いろいろな人間の組織の中で混ざる機会）を与えて頂き、いろいろな経験を積ませて頂きました。

その間、平岡先生や、現在の私の上司でもあり本学の広報担当の副学長を務められた多田豊教授の方針で、研究室のホームページを充実させるということで、こまめな情報発信に努めて参りました。

やっと本題に入ってきましたが、今回の出演依頼は、そのホームページを見たという番組を制作されている日テレアックスオンからの1本の電話から始まりました。「世界一受けたい授業」という番組は私も時々見ていた番組であり、非常に著名な方が出演する番組で、私のようなどちらかといえば若手の部類に入る研究者はあまり出演していないような印象でした。したがって、その電話もにわかには信じられず、まるで夢のような感じでした。そして「混ぜる科学」というテーマで番組を作れるかどうか、3月下旬に話を伺いたいということで、研究室に番組のAP（アシスタントプロデューサー）とD（ディレクター）が来られることになりました。お話しをしている間はビデオが回り続けており、非常に緊張した中で、こちらの研究室の紹介や向こうが用意してこられたテーマなど

で、雑談を交えながら相談をいたしました。それを材料に制作会議にかけて、番組が成立するかどうかの検討が行われ、何度も番組のためのネタの相互提案やそれに関する説明の起案等が繰り返され、4月上旬に制作決定の通知が参りました。そして、アニメ映像のための画像や研究紹介の画像を撮影するために4月中旬に再度の訪問がありました。4月下旬に収録というスケジュールが決まっていたため、そこから毎日、何度もメールのやりとりや、画像のやりとりを行い、台本もバージョンがいくつになったかわからないほど修正が繰り返されました。こうして、無事に本番を迎え収録も終わり、約1ヶ月後の5月22日、無事に放映されました。

2. テーマの選択と解説

放送では、非常に多岐にわたるテーマで授業が展開されました。このテーマの選択に関しては、日テレアックスオンからの提案にこちらからの提案を混ぜながら、最終決定は日テレアックスオンのご判断にゆだねました。最初のテーマ選定の段階ではものすごい数の提案がされ、それをすべて解説して下さいといったようなものであり、中には全く知らない事柄や、これはちょっと違うんじゃないかというようなものもありましたが、こちらは大変勉強になりました。ただし、一貫していたのは、一部の専門家が興味を引くようなものではなく身近なものであり、主に小中学生や主婦層が興味を引くようなものということでテーマが選定されていました。食に関するテーマが多かったのはそのためだと思います。(同時に放送されたお茶に関する授業も食に関するものでした。)

番組冒頭に放送されたコーヒーの混ぜ方というテーマは、日テレアックスオンと私の思惑が一致したものでした。実験方法もあのような形式にするということが始めから決まっていたわけではなく、全くの偶然で思いついたものであり、制作会議でも十分な驚きを持って受け入

れられたものであるということをお聞きしました。

3. 感想

まず、たった15分(私の担当分だけに限りませんが)の番組を作るのに、ものすごい手間と時間と人数が関わっているんだなという驚きです。それと制作に携わる方は、ものすごくわかりやすいCG画像をつくる技術および編集技術を持っているんだなということを強く感じました。まさしく「百聞は一見に如かず」です。極端な表現をすれば、あの技術を持っていれば、我々が日頃90分もかけて行っている授業を、15分もあれば十分可能なのではなかろうかということです。(それを作る労力はとんでもないものになるのでしょうか。)

次に実際の収録時の感想です。いろいろな現象に対して私が説明するところがあるのですが、あれはこちらが作成した解説をもとに、Dと放送作家が一般の方にわかりやすいように台本として練られたものでした。Dの方からは「台本にはこだわらずご自分の言葉で説明して頂いていいですよ」と言われていたのですが、解説ビデオの進行と同時に説明を加えなければならないため、本番前に何度もビデオを見ながらセリフまわしを練習しました。それでもやはり、いざ本番では緊張のため、段取りを間違えることが何回もありました。そのとき、いつもさりげなくフォローを入れてくれたのが、堺正章校長でした。本当に鋭くて優しい方だなと思いました。最も印象的だったのが、コーヒーにミルクを混ぜる問題を解説するところで、最初私はミルクを入れ忘れ「これが正解です」とやってしまったのですが、その後さりげなく「では先生、次は実際にミルクを入れて解説して下さい。」とフォローしてくれたことです。

4. エピソード

最大のエピソードといえば「デンプン事件」

でしょう。収録で使った実験装置や試薬はこちらからスタジオに事前に送ったものでした。米倉涼子さんに手伝って頂いた、混ざると色が消える実験で使った試薬のうち、ほんの少量指示薬としてデンプンを使用するのですが、それを荷物と同包するのを忘れていました。リハーサルの前に実験準備をしようとしたところデンプンがありません。なくても片栗粉で代用できるので、スタッフの方に早速近所で購入してきてもらい問題解決！と思ったところ、片栗粉をどれだけ入れても色が付きません。かなりの分量投入してやっと青くなってきたのでホッとしたところ、今度は脱色液を入れてもなかなか色が消えません。そうこうするうちにリハーサルの順番が来て、その場はなんとかデンプンなしで黄色い液を脱色して切り抜けたのですが、やはりそれではダメだということで困り果てました。本番まで約6時間あったのが幸いでした。そこで活躍してくれたのは、同行してくれた研究室で事務を担当してくれている高橋さんです。名古屋の学生に片っ端から電話をかけて下さり、学生に研究室からデンプンを東京まで新幹線で持ってきてもらうという荒技を成し遂げてくれました。これで何とか本番に間に合い事なきを得ました。日頃から詰めが甘いところがあると言われていましたが、まさかこんなところで出てしまうとは思いませんでした。ただし、あとで同僚の分析化学の教員に確認したところ、デンプンは非常にくせ者で、精製品でもメーカーが替わると指示薬として使えないことがあるということを聞き、非常に勉強になりました。

本番組は、収録では1時間の授業になっていました。内容や段取りはおおた台本通りに進行していきますが、クイズ形式になっているところやゲストのリアクションなどはすべて台本はなく、生の反応であり、ぶっつけ本番です。したがって、本当に授業形式で収録が進行していきます。収録の初期は非常に緊張して、手も

震えていたのですが、そのうちのめり込めると会話がものすごく楽しく、放送されていないハプニングも続出し、ついこちらボケをかましてみたくなり、悪のりしてしまったところが何回もありました。ほとんどカットされましたが、1カ所だけ台本にないボケが残っていました。

それにしても、今回は大変な人気番組に多くの芸能人の方と同じ空間にいたという、人生に二度とない経験をすることが出来ました。私の専門である化学工学がバラエティーと混ざり合って非常にいいものが出来たと思っています。これにより少しでも名工大が一般の方々に認知され、受験生も増えてくれたら幸いです。最後に、今回声をかけて頂いて、おつきあい下さった日テレアックスオンの方々、これまでご指導頂いた非常に多くの先生や先輩方、内緒の中でいろいろご教示頂いた先生や、実際に手伝って頂いた学生諸君らをはじめ多くの皆様方に厚く厚く御礼申し上げます。



リハーサル（入場シーン）

随筆

企業撤収

加藤 雅樹 (D12)

「敗軍の将は以て勇を言う可からず」

「智者も千慮に必ず一失有り、愚者も千慮に必ず一得有り」

旧日本陸軍には『戦闘綱要』が制定され第四篇第二章「退却」には13項の戦法が記載してある。企業経営業務個々において、停廃止の事例は多々発生する。最大事は企業撤収である。組織のトップにある者が如何に対処するか。一つ間違えれば混乱を招き企業崩壊に陥る。

母校卒業以来伯父・父共同経営会社（毛織物染色整理業）に入社、父担当の技術・人事・組合出席の業務を引き継いだ。紡毛紡績を併業して、工場建設・機械や副資材買付け初め営業が軌道に乗るまで担当。後従兄弟が担当し分社した。従来 of 事業は筆者が継承し、夫々が単独オーナーとなった。

一宮市には戦前から尾西毛織物王国と言われる地場産業があった。終戦直後の布不足で、ガチャ万と言われる位織物が飛ぶように売れた。これまでの商習慣を無視したお産手形・台風手形と言う長期手形を流通させてしまった。戦後派若者たちのこうした放漫経営に、これまでの毛織物機屋までが巻き込まれてしまった。こんな放漫経営感覚では何れ近い将来に、一宮の尾西毛織物地場産業は崩壊すると感じ取った。

小社は従業員200人程の中小企業で、約500人の生活を支えている訳である。昭和36年に業界から撤収作戦を秘かに単独勘案した。大手同業社へ如何にして移譲するかを基本とした。

長男の大学合格を機に家業を継ぐかを訊ねた。「職業選択は自由にさせて欲しい。繊維産業はグローバルには無くならない。朝鮮・支那・台湾・東南アジア諸国は繊維産業に重点を置く復興施策を採るだろう。低賃金諸国製品に対し、現在日本の高賃金では太刀打ち出来ん。

従って日本に繊維産業が残る可能性は少ないと想う」。『自分の考えと全く同じだ。職業選択はお前の自由に任せる』。基本方針に従い直ちに企業撤収に着手した。

従業員を1ヶ年間解雇しない・賃下げもしない2条件付で、労働組合（上部団体了解）は結構ですと言回答で、昭和44年（54歳）対象会社へ主導経営権を無事移譲した。3年後の移譲会社の総会後に、当該全持株売却を申し入れた。これで企業撤収が完了した。この時第一次石油ショックが発生した。

その後地場産業は予想以上早期に周知の如く崩壊してしまった。

本家伯父は会社運営重要案件を父通し下問、進言通りに実施されて怖かった。戦中羊毛統制経済の中を合併・廃業もせず、幸い終戦までフル操業で切り抜けた。終戦年1月6日応召9日深夜博多乗船、玄界灘敵潜水艦を搔い潜り翌朝釜山上陸。支那大陸縦断し南京の高射砲連隊高射機関砲中隊にいた。

伯父は『雅樹は未だ帰らぬか』と写真握り締め乍ら終戦直後10月29日に逝く。終戦翌年1月50kg弱の栄養失調骨皮で鹿児島港復員、連絡不能のまま帰宅した。

伯父・父が大正11年創業事業を継承し、昭和48年に企業撤収し幕を下ろす。生涯従業員一人も泣かせず経営し、伯父・父から叱責は無いものと想っている。

我が人生に悔いなしと言える人は少なからう。最善を尽くしただけが慰めであると推考する。伯父が三食毎に長火鉢で一合燗つけた愛用酒器錫銚ちろりを形見分けで伯母にねだった。

今宵また 銚ちろりと 伯父偲ぶ

（南京復員上等兵）

一読を勧める：将口泰浩著『キスカ撤退の指揮官』（産経新聞出版）

学内ニュース

国際交流会館のWelcome Party

大学院 物質工学専攻2年 荒井 麻央

2010年4月30日、研究や勉学の目的で名工大へ来て国際交流会館に入居した留学生を対象とする春のWelcome Partyが国際交流会館1階ロビーで催された。先生方や元会館入居者、友人らが参加し、約120名の人々が集まった。このPartyは、名工大に来た新留学生を歓迎することを目的とした、名工大国際学生会（NITIA）が主催する年2回の恒例行事である。NITIAの各国リーダーと会館チューターが当日に向けて何度も話し合いを重ね、ようやく実現したものである。

食事はNITIAのメンバーである各国の人々（中国、ベトナム、マレーシア、インド、アフガニスタン）とチューター（日本）が手作りでその国の料理を振る舞い、特に中国の人々は皮から手作りの水餃子を50皿分用意してくれた。調理法や材料について尋ねることをきっかけとして、皆が料理を食べながら会話を楽しんだ。その後、会館チューターが当日のために結成し練習を重ねたバンドの発表や、名工大在学生によるヨーヨーの披露等が行われた。よさこいサークルによる発表が行われた時には、初めて見る日本の踊りと法被の衣装に留学生が皆関心を寄せていた。最後には、去年まで会館の管理人を務めていた久野さんの指導のもと、全員で輪になり炭坑節を踊った。インドの人々は日本の踊り方が非常に面白かったらしく、特に積極的に踊りを楽しんでいた。

今回Welcome Partyを開催するに向けて行った会議では、言葉の壁、お金や約束事に対する価値観の違いを強く感じた。以前まで日本で常識と感じていたことが、世界では常識でないという当たり前のことを実感した。おそらく各国の人々も感じていただろう。そのため私達は何度も会議を重ねた。今考えると、その時間こそが最も素晴らしい国際交流の機会だったと思う。会議参加者の皆が、新留学生が本当に楽しめるPartyを開きたいという思いを強く持ち、全員が納得できるまで全てのことを話し合い決定した。様々な国の人々が同じ目標に向け真剣に話し合い、それを通じて相互に文化や宗教を認識していくことこそ、真の国際交流なのではないかと感じた。



写2. 久野さんと炭坑節を踊る様子



写1. 各国の料理を楽しむ人々

マレーシア工科大学の学生らが名工大を訪問

去る5月10日、協定校の1つであるマレーシア工科大学から土木工学科の学生ら14名が名古屋工業大学を訪問した。今回の訪問は、同大学が実施している国際教育プログラムの1つであるGlobal Outreach Program (GOP) の一環で要請があったもので、将来名工大を始めとする日本の大学院等で研究活動が続けたいと希望している学生らを対象として、名工大が提供している教育研究プログラムの紹介や共同研究の可能性について討議を行うことを目的としたものであった。

一行は、名工大到着後、山本国際交流センター長や曾我大型設備基盤センター長らを表敬訪問し、相互の大学の取り組みについて意見交換を行った後、名工大の教員から2大学間で実施されている共同研究や土木分野で現在取り組んでいるいくつかの研究テーマについてプレゼンテーションを聞いた。また国際交流センターによる歓迎昼食会を挟んだ午後からは、土質関係の実験設備を始め、日本語の授業の様子や外国人留学生のための宿泊設備である国際交流会館等、学内の施設を精力的に見学した。

マレーシア工科大学と名工大とは2006年6月29日に交流協定を締結以来、国際セミナーの開催、共同研究活動等を通じ、研究者・学生の交流を活発に行っており、今回の訪問においても終始和やかな雰囲気の中、交流が行われ、相互の理解を深めるのに大変有意義な機会となった。

名工大では昨年、日本学術振興会（若手研究者交流支援事業）の支援を受けて「アジアの環境リスク低減に資するナノ材料若手研究者育成プログラム」を実施した。本事業はアジアにあるマレーシア工科大学を含む6大学から若手研究者を19名招へいし、ナノ材料に関連した研究室で研究指導を行い、アジア諸国の環境問題の解決に資する将来の研究者を育成するものであった。今回の訪問は本事業をきっかけに実現したものであり、今後もこのプログラムを通じて構築されたネットワークの更なる関係強化が期待されている。

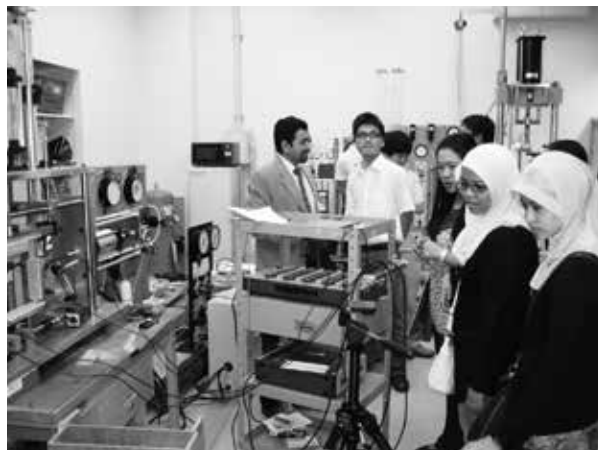
(事務局)



ラウンジでの歓迎昼食会



名工大の取り組み紹介及び意見交換



学内研究施設の見学の様子

名古屋工業大学にて「先端研究施設共用促進事業」の講演会を開催

名古屋工業大学では、5月17日「名古屋工業大学・信州大学連携講演会」を開催した。これは、文部科学省が実施している「先端研究施設共用促進事業」を広く紹介するとともに、名古屋工業大学のイノベーション創出等科学技術及び産学官連携の取り組みを広めるために開かれたもの。

文部科学省先端研究施設共用促進事業は、研究開発力強化法を背景に、大学・独立行政法人等の研究機関等の保有する先端研究施設の共用を促進し、基礎研究からイノベーション創出に至るまでの科学技術活動全般の高度化を図るとともに、国の研究開発投資の効率化を図る取り組みである。同事業は、平成19年度に開始された「先端研究施設共用イノベーション創出事業【産業戦略利用】」を前身として平成21年度から実施されているもので、平成22年度現在37機関が採択されている。名古屋工業大学においては平成21年度に大型設備基盤センターが擁する「表面分析装置群」を使用した「表面分析装置の共同利用による材料開発の高度化」が、また信州大学においては平成19年度から「ナノカーボン産業拡大の為のカーボンバレー構築支援事業」が採択され実施中である。

講演会は、名古屋工業大学木下理事（研究担当）による、名古屋工業大学の産学官連携状況に関する紹介から始まり、文部科学省研究振興局研究環境・産業連携課新技術革新室能見室長による「先端研究施設の共用促進とイノベーション創出」、引き続いて経済産業省中部経済産業局地域経済部産業技術課青木太久美課長の「イノベーション創出のための経済産業省の取り組みについて」の講演が行われた。さらに名古屋工業大学ならびに信州大学よりそれぞれの事業の特色と利用事例についての説明を行い、100名を超える参加者が熱心に聞き入っていた。

名古屋工業大学では、これを機にさらなる当該装置群の利用拡大を進めるとともに、産学官連携を通じたイノベーションの展開を図る予定である。（事務局）



100名を超える聴衆



先端研究施設共用促進事業の
説明を行う能見室長